

審査を終えて

NPO 法人日本こどもの安全教育総合研究所理事長 宮田 美恵子

小学生の部

わが国の交通事故発生状況は、統計開始の昭和二十三年から令和四年現在まで、事故件数では平成十六年の九十五万二千七百二十件、死亡事故では昭和四十五年の一万五千八百一件をピークとして、大きく減少しています。年齢層別の死者数推移では、平成二十四年から令和四年現在まで、小学生に相当する五〜九歳、十〜十四歳についても、一定数を推移しながらも減少傾向を見せています。事故を一件でも減らすためには、引き続きの環境整備や教育などが必要です。

地域では、交通安全のための母の会やボランティア、推進員、指導員の方々が中心となって、通学路などで子どもたちを見守ってくださっています。

今年も作文の中にボランティアの方々とのエピソードが多数登場しました。見守る方々とのふれあいは、事故を防止するだけでなく、子どもたちに自他の命の大切さや、交通ルールと事故防止活動の重要性を意識づけ、見守る人たちへの感謝の心などを育んでいます。

交通ルールについては、令和五年四月一日以降、すべての自転車利用者のヘルメット着用が努力義務となりました。事故を防止するには、交通安全について話し合う、ルールを確認する、家族の約束を決めるなど、各家庭での取り組みが大切です。

大人が交通安全の話をすることで、子どもは子どもなりに考え、疑問を持ち、理由を知って理解を深めるこ

とができるのです。

交通安全について考える経験は、子ども自身を生涯守る宝となります。交通安全ファミリー作文は、経験を自分事として捉え、考えて書くプロセスを通じて、子どもたちの心と体に交通安全が定着するきっかけとなるでしょう。交通安全ファミリー作文コンクールは、開始以来四十五年となりました。参加してくださる子どもたちが毎年大勢いるのはうれしいことです。子どもたちの交通安全教育に対する多くの方のご理解とご協力のおかげで、今年は、小学生の部は全国から千百八十五点の応募がありました。予備審査を経て、八人の審査員による本審査を行った結果、次の各賞を決定いたしました。

最優秀作（内閣総理大臣賞）小学生の全体から一作品

優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）小学生各学年から一作品以内

佳作（警察庁交通局長賞）小学生各学年から一作品以内

表彰作品および講評は次の通りです。

最優秀作（内閣総理大臣賞）は、栃木県の四年生 前野ちえりさんの「班長の言葉」が受賞しました。

この作品は、登校班の班長になった兄と筆者の気付きがテーマです。筆者は登校班の班長である兄に注意されるのが嫌でしたが、雨の日に自転車の中学生とぶつかってケガをしたことをきっかけに、嫌われてでも妹を守ろうとしていた兄の責任感の強さと思いやりに気付きます。筆者は自身の不注意を反省し、みんなの安全のために堂々と注意できる兄を誇らしく思うようになりました。

この作品には、兄のように、嫌われてでも注意できる勇気ある人になりたいという気持ちの変化がよく表現されていました。

また、不注意による危険性に気付いただけでなく、兄の様子から理解を深め、行動を起こした筆者の姿が描

かかっている点などが高く評価されました。

次に、優秀作（文部科学大臣賞）は、埼玉県の一学生 山本幸奈さんの「きりんさんになる」が受賞しました。この作品は、就学を機に一人で通学するようになった筆者のドキドキする気持ちと家族の約束の話です。

お母さんは、毎朝の登校時に必ず「きりんさんになってね」と声をかけるそうです。これは、きりんのように首を長くして道路の左右を覗き、安全確認をする家族の約束です。この約束を守るだけでなく、「お友だちにも、この合言葉を教えてあげたい」と、他者の安全のためにも行動する姿が描かれており、優れた作品であると評価されました。

続いて優秀作（国務大臣・国家公安委員会委員長賞）のうち、一学生は、東京都 中村心美さんの「こうつう少年団とわたし」が受賞しました。

交通少年団に入団した筆者は、横断歩道を渡る際に手を挙げるのは、ドライバーに気付いてもらうためだと知りました。手を高く挙げて渡ると、止まってくれたドライバーと合わせた目から心が通い合い気持ちがよいこと。家庭では、ヘルメットの紐はカチツと音がするまではめることをお父さんに教え、その音で親子がよいする心地よい経験をしたことが描かれています。また、交通少年団として警察学校にも行き、警察官が厳しい訓練を行う様子に触れました。下校時、つい友だちと走り出してしまいそうになると、真剣に訓練していた警察官の姿を思い出し、「いけない、わたしはこうつう少年団だった」と自らを戒めているそうです。

学んだことを守り実行する素直な気持ちと、交通少年団として誇りを持って安全行動をしようとする姿が見える優れた作品だと評価できます。

二年生では埼玉県 神宮由衣さんの「自てん車」が受賞しました。この作品は、筆者のお母さんが子どもが乗った自転車にぶつかられてケガをしたことをきっかけに、交通事故について話したことを描いた作文です。

事故後、お母さんは子どもたちに自転車の乗り方について話すことにしました。被害者がお年寄りだったら

命に関わっていたかもしれない、自分の家族が事故の加害者になってしまいかもしれないと怖くなったためでした。お母さんの話から、筆者は今後一人で自転車に乗るようになった際には、自分も加害者になるかもしれないことをしっかりと心に留めようと考えたことが描かれています。被害者にも加害者にもなってはならないという、子どもを守りたい母親の教訓が述べられた、優れた作品であると評価されました。

三年生は、愛知県 山田彩晴さんの「交通安全とわたしのちかい」です。この作品は、三年生になってようやく一人で自転車に乗ることが認められるようになった筆者が、大きな道路の隅にお花や菓子が供えられている意味をお父さんから教わった話です。筆者はそこが子どもの死亡事故があった場所だとは知りませんでした。お父さんは車の「死角」に気を付けるようにとも話しました。

筆者は事故で死んでしまった子どもに思いをさせ、自転車には乗りたいけれど怖い気持ちが大きくなっていくのを感じたのでした。

筆者はお供えの場所を通るたびに「命の大切さ」を考えるようになり、気を引き締めることを強く胸に刻みました。「大好きな自転車に乗る際は交通ルールをしっかりと守る」という決意が述べられ、筆者の心の動きがよく描かれている作品として評価されました。

四年生は、熊本県 村上まどかさんの「自分の身は自分で守る」です。

筆者は、自分と妹を二年生の初め頃まで徒歩で学校に送っていたお母さんのことを、心配性なのではないかと考えていました。一年生の終わり頃にはお母さんと一緒にできることを恥ずかしく感じ、「もうついて来なくて大丈夫だよ」と伝えたものの、その後もしばらくは一緒に行くことになりました。

一緒に歩いている間に信号の待ち方や角の曲がり方など、注意すべき点を丁寧におさらいしていききました。

このように、地域特有の状況や個別の道で、注意すべき点について具体的な対策を取ることは重要です。また、「心配性のお母さん」という言葉からは親子の愛情が感じられます。子どもたちの安全に対するお母さんの思

いを十分に理解し、安全行動が身についたことが伝わる作品として評価されました。

五年生は、香川県 福山陽樹さんの「家族をもう悲しませない」です。筆者は一年生の時に、横断歩道のな
い道で手を挙げて渡ったところ、気づかずに走って来た車との事故に遭いました。近くにいた姉は泣き、駆け
つけたお母さんも泣きそうでしたが、筆者自身は何が何だかわからずに怖かったといいます。

この事故の経験から、家族で交通安全について話し合い、必ず横断歩道を渡ることを確認しました。そして、
自分自身がルールを守らなければ、家族だけでなく事故の相手も悲しませることになるとよく理解し、二度と
家族を悲しませない、と決意しました。交通安全ルールを守ることの重要性が筆者の心の動きとともに描写されて
おり、他者の気持ちになつて考えることを通して、強い決心が読み取れる優れた作品であると評価されました。

六年生は、徳島県 伊原里咲さんの「大切な妹」です。四月から小学校に上がる妹をもつ筆者は、いつも両
親や自分と手をつないで歩いている妹が一人で登校することを、まるで「両親のような気持ちで妹を見守って
心配でたまらない」と感じました。そのため、妹だけの交通安全教室を家族で開催することになったそうです。
筆者は妹の姿を通して、自らも両親から学んだ交通安全教育の大切さや、登下校を通して気付いた危険な場所
や交通ルールなど、注意すべきことをふりかえりました。両親が自分を見守り導いてくれたように、今度は自分
が大切な妹を交通事故から守りたい、という温かく強い気持ちが表された優れた作品であると評価されました。
子どもたちは発達段階に応じ、交通安全に対する思いを率直に表現してくれました。子どもたちの気付きは
大人にとつては新鮮であり、感銘を受けるものでもあります。

一つひとつの経験を大切に、交通安全行動を続けてほしいと願っています。

最後になりましたが、多数の応募作品を読み、ご協力くださいました予備審査員の方々、事務局の方々、作
品集作成にご協力くださった関係者の方々には大変お世話になりました。また、本審査会において、真正で厳
正な審査を行ってくださいました審査員の方々に、心よりお礼を申し上げます。

令和5年度交通安全ファミリー作文コンクール審査員 － 小学生の部 －

(敬称略、順不同)

宮田美恵子	NPO 法人日本こどもの安全教育総合研究所理事長
羽 藤 雄 次	足立区子ども安全安心プロジェクトチームリーダー
宮 崎 朋 子	全国公立小・中学校女性校長会会長
入 谷 誠	一般財団法人全日本交通安全協会専務理事
幸 田 徳 之	一般財団法人日本交通安全教育普及協会専務理事
児 玉 克 敏	内閣府政策統括官(政策調整担当) 付参事官(交通安全対策担当)
安里賀奈子	文部科学省総合教育政策局 男女共同参画共生社会学習・安全課長
日 下 真 一	警察庁交通局交通企画課長